

別紙解答用紙に解答すること。

問 次の記事を踏まえて、「大学での理想的な課外活動のあり方」について、600～800字で述べなさい。

【記事1】(出典：朝日新聞 EduA ウェブサイト，2021年3月1日，文章を一部省略した)

日本のように学校での部活動が盛んなのは、世界的にみて珍しいです。体育の授業は海外でもありますが、学校で放課後や休日に生徒が教員の指導の下で、1年中活動するというのではありません。ここまでスクールスポーツが活発なのは日本だけです。米国では、高校ではアメリカンフットボールやバスケット、野球をはじめ盛んです。ただ日本と違うのは、シーズン制になっていて、季節ごとに入部と解散を繰り返すことです。例えばアメフトは花形スポーツで、8月に入部希望者が集まって練習し、9月、10月に試合があり、終わると解散します。冬はバスケットをしたり、春になると野球をしたりします。3～4カ月間のシーズン制になっていて、1年中同じスポーツをすることはありません。また、技術的にうまい生徒しか入れません。トライアウトの選抜制度があり、試合に勝つための仕組みができています。アジアを見ると、中国や韓国はスポーツが学校で行われることが多いですが、それは民間や地域の受け皿が発達していないためです。それにスポーツのエリートを育ててオリンピックを目指すという目的があり、だれでも気軽に参加できるものではありません。スポーツを教育に結び付けて文武両道を目指すというのは、日本だけです。

日本の部活動が世界的に特異なのは、教育的価値が与え続けられてきたからだだと思います。部活動は、もともとは生徒が好きで楽しむもので、戦前も盛んでした。朝日新聞社が支援する高校野球もそうですね。純粋に部活動をしたい生徒が面白いからやっていて、むしろ学校側が熱心すぎる生徒にストップをかけたりして、過熱する部活動をどう抑えるのかに苦心していました。それが戦後は反転します。学校が部活動を推奨、強制するようになるのです。この背景には「子どもの自主性」という価値観が関わっています。戦時中に学校が軍国主義的な教育をしたことで、一方的に上から注入する教育ではいけないという反省から、民主的な人間を育てるにはどういう教育をすればいいのかという議論の中で、「子どもの自主性」が重要な論点になりました。生徒が自分の力で試行錯誤し、自分たちがしたいことを作り上げていくためには、「子どもの自主性」を尊重することが大事だと考えられ、そうした考えが部活動を後押ししていきました。戦後に始まった民主主義社会で、部活動は素晴らしいものであり、学校としてサポートしようという価値観の転換があったのです。

戦後の民主化が一つ目で、二つ目は1964年の東京五輪が契機です。五輪に向けていい選手を育てようと、身体的な能力を伸ばすことが教師の役割になりました。そして五輪が終わると、一部の選手だけでなく、すべての生徒に平等にスポーツの機会を与えようとなりました。部活動に関心のない生徒も対象になるようになり、60年代後半以降に部活動の加入率は上がっていきました。三つ目の拡大期は80年代で、非行問題が背景です。「スクール☆ウォーズ」という、非行生徒をラグビー部で更生させる学園ドラマがヒットしましたが、部活動は非行予防や生徒指導に有効だとされ、どんどん拡大していきました。その拡大が続いたまま、部活動をめぐる様々な問題が出てきて、これは大変だ、これからどうするのかと議論されているのが現在です。

部活動は行きすぎた指導や教師の働き方など様々な問題点が指摘されています。一方で、ほどほどの活動であれば、人間関係を広げたり、チームで協力することを学んだり、自分で定めた目標に向かって努力したりするプラスの面もあると思います。体力づくりに役立つといいますが、やり過ぎるとけがをします。人格形成に役立つといわれますが、科学的な証明はありません。部活動をしすぎて学業成績が落ちることもあるし、人格がゆがむこともあります。日本の有名企業は以前、体育会出身者を好んで採用するところがありました。人付き合いがうまくて、体力があり、上からの指示に従順だからといわれていました。日本企業もかつては従順さとか協調性を求めていましたが、今はトップ企業を中心に変わっています。

文武両道を尊ぶ風潮が日本にはあります。勉強だけでなく、スポーツや教養を身につけなければいけないという気風は、旧制高校の頃からあります。ただ、学校のミッションとして「文武両道」を掲げたのはそう古くないと思います。受験競争が激しくなっていった時期に、世の中の「勉強、勉強」という風潮へのカウンターとして、勉強だけではダメだと、文武両道のスローガンを掲げたのかもしれない。

【記事2】(出典：Yahoo! JAPAN ニュース [個人記事]，2018年12月26日，一部抜粋した)

日本では、教育的に良いことだからという理由で、運動部活動は拡大し、一部で肥大化していった。米国でも、大人になったときに競争主義、能力主義を生き抜かなければいけないからと、それらを子どものスポーツに取り込むことの弊害は決して小さくない。競争から脱落し、運動する機会を持たない子どもの問題。ランキングや勝敗を重視することで基礎的な技術練習が後回しになる、競争により子どもの心身がすり減るなどの問題だ。教育的意義や人格形成に役立つと考えられるときほど、慎重に進めるくらいでちょうど良いのかもしれない。

以上